

近代 Санктペテルブルクの出版人たち

—1860年代と1870年代の比較を通して—

巽 由樹子

はじめに

本稿は、近代 Санктペテルブルクの出版人たちの活動を、近年、革命前ロシア史の研究において関心を集める都市文化の問題に位置づけて再考する試みである。

19世紀前半のロシア都市では、民間の出版活動は低調であり、主要な定期刊行物は官製誌が多く、流通域も限られていた。しかし1860年代になると「厚い雑誌 *tolstye zhurnaly*」が、そして70年代以降は絵入り雑誌というメディアが、ペテルブルクから全国へと展開した¹。この変化の背景にある近代ロシア都市の出版事情については、バレンバウムやディネルシュテインが1980年代以降とりあげはじめたが²、90年代に入るとレイトブラトが、ロシアにおける出版メディアと読者の多層性を明らかにする中で、都市の半教養的読者の存在を指摘した³。また、北米ではマクレノルズが新聞に焦点をあて、このメディアにおける都市の消費文化の影響と中間層が果たした役割の大きさを示した⁴。

こうした形で近代ロシアの出版メディアが都市文化と関連づけられるようになったのは、比較的最近のことである。かつてソ連期の書誌学は、書物がいかに革命に寄与したかの究明を公式の目標として掲げたため、革命派インテリゲンツィヤの出版活動や労働者読者に関心を集中させた⁵。西側でも、「新しい社会史」と呼ばれた潮流—政治史とも経済史とも異なる独自の分析対象として社会をとりあげ、その構成要素として農民や労働者に着目する手法—に呼応する形でナロードに大きな関心が寄せられたゆえに、革命前ロシアの読書論のスタンダードとなったのは、農村で愛好された木版出版物ルポークとその読者についてのブルックスの研究であった⁶。しかし1970年代以降、社会史はアナール学派やカルチュラル・スタディーズの影響のもと、生活文化から政治文化まで、「文化」を分析の切り口に据える方向へ進んだ。こうした社会史研究における文化史への転回がソ連の消滅という出来事と重なった結果、1990年代以降、近代ロシア社会史では主題の変容が露わになり、ソ連史学からも旧来の社会史からも捨象されてきた都市文化の問題に関心が向けられるようになったのである⁷。近代ロシアの出版メディアを都市文化に位置づけた考察は、いま取り組まれるべき課題の一つであろう。

都市文化をめぐる議論には、第一に、近代ロシアの「市民社会」的な要素、すなわち自発的結社などにおける公衆の能動的な活動に注目する研究群がある。識字委員会のような協会の活動を、ロシアでの市民社会の成熟度の指標としてとりあげるブラッド

リーはその典型である⁸。自発的結社 *voluntary associations* とは、18 世紀後半より、アメリカと欧州全域でさまざまな公共善の実現を目標に設立された一種の社交団体で、綱領や選挙、委員会、議事などの運営によって、構成員に市民的实践を経験させ、民主主義の形成に寄与したものとされる⁹。そして第二に、大衆文化時代の前史として、都市民の受動的な知覚や娯楽・消費性向に力点を置く研究群がある。大衆文化 *mass culture* とは民衆文化 *popular culture* と異なり、近代以降の都市に特有の、金銭的な価値体系が導入され、商業化された文化である¹⁰。上述のマクレノルズは新聞の他に、メロドラマと、ツーリズムやスポーツなどの余暇活動という多様な都市文化のトピックスをとりあげて、都市民の生活に作用する消費のイデオロギーを分析してきた¹¹。またレベジェヴァは、19 世紀後半ロシア都市の商業化された文化を 20 世紀大衆文化の萌芽と見なし、1920 - 30 年代までを射程に、教養層の文化観の変容とロシア文化と西欧文化との共時性を論じた¹²。

この二つの視角はともに、都市を舞台にした近代ロシア社会の自律性の高まりを指摘する。これは、帝政期ロシア社会は国家の強権のもと従属的であったとする旧来のイメージに、修正を迫るものである。また、文化の商業化は、自発的結社が掲げた社会の道德改善という大義を無力化した要因の一つとされる¹³。それゆえこの二つの視角は、結社全盛の時代から大衆文化時代へ、という時系列に位置づけることができる。

冒頭で述べた、1860 年代から 70 年代にかけての「厚い雑誌」と絵入り雑誌の盛衰は、ペテルブルクにおける出版人の交替を反映していた。そしてそれぞれの出版人の類型には、「自発的結社」および「文化の商業化」という要素との結びつきを見出すことができる。本稿はこの二者の交替を詳述することによって、ペテルブルクの出版に焦点を絞る形で、近代ロシアにおける社会の自律性と、結社の時代から大衆文化時代への過渡期の具体相を示したい。

1. 1860 年代の出版人

ニコライ一世はその治世末期、1848 年のヨーロッパでの革命の脅威から、「検閲のテロル」と呼ばれる言論抑圧政策をとった。しかしクリミア戦争に敗北し、1855 年に新帝アレクサンドル二世が即位すると、教養層に属する人々は自国の後進性に危機感を覚え、改革を叫ぶようになった。このとき、ラディカル、保守、リベラル各派のインテリゲンツィヤや、地理学者、化学者ら学者たち、医師、教師といった専門職者、そして政権中枢に接する開明派の官僚らからなるロシアの教養層が、混然となって運営し、活動のための拠点としたのが種々の「協会 *obshchestvo*」であった。

先駆的な活動としては、開明官僚と地理学協会が挙げられる。開明官僚とは、ニコライ・ミリューチン、ザブロッスキー＝デシャトフスキー、アラペトフ、ギルス、ソロヴィ

ヨーフラ、国有財産相キセリョフの下で諸改革事業にあたった経験のある若手官僚であり、後に農奴解放を中心とする「大改革」の政策立案者となった人々である¹⁴。ニコライ一世末期に改革の必要性を認識していた彼らは、農村と都市の現状把握のために統計データの入手を切望したが、反動化した政府は一切の統計調査を中止していた。そこで彼らは帝国地理学協会に着目する。ベロム、リトケラ地理学者によって 1845 年に設立された地理学協会は、当初は中央アジア及び極東開拓のための地理・統計データ収集を目的としていた。ところが 1840 年代末に開明官僚の一人であるゴロヴニンが協会の書記になると、ニコライ・ミリューチンと兄のドミトリー・ミリューチン、ザブロッキー＝デシャトフスキーら同志を次々に会員とする。そして彼らは地理学協会に集積される全国の統計データを利用して、セミョーノフら改革に関心を抱く地理学者の参画を得ながら、社会の現状分析と改革計画の深化に取り組んだのであった¹⁵。

アレクサンドル二世期に入ると、社会改革のための農村啓蒙を目的とする協会が多数設立される。ストレカロヴァを代表として設立された「良書普及協会 (Obshchestvo rasprostraneniia poleznykh knig)」は、エレナ・パーヴロヴナ大公女ら皇族を名誉会員に迎え、ゴリーツィナ公爵夫人、メシチェルスカヤ公爵夫人といった貴族女性からゲンナディ、アルセニエフら書誌学、統計学を専門とする社会活動家たちまでを会員とした¹⁶。また、「ペテルブルク識字委員会 (Peterburgskii komitet gramotnosti)」では、ツルゲーネフのような文学者からルバーキンらラディカルな書誌学者、教育学者までが一体となって活動した¹⁷。そして、農民の革命参加を目指して啓蒙事業に取り組んだとりわけ強力な協会組織が、革命的秘密結社「土地と自由 (Zemlia i volia)」であった。これら啓蒙的な諸協会は、地方都市や農村に書籍倉庫 (knizhnye sklady) と呼ばれる小さな販売所を設置し、自らが発行した識字普及のための出版物を提供した¹⁸。

改革機運を生み出した諸協会は、何らかの出版メディアを拠点とし、そこでの成果公表や言論開陳を重視した。たとえば開明官僚たちは、海軍省の機関誌『海軍選集 *Morskoi sbornik*』で改革案を積極的に世に問うたし、啓蒙的な諸協会は成果報告書を定期的に発行した。そして民間メディアでは、『現代人 *Sovremennik*』、『祖国雑記 *Otechestvennyye zapiski*』、『ロシア報知 *Russkii vestnik*』など、「厚い雑誌」と呼ばれた月刊誌が、諸改革のための議論の場となった。とりわけネクラソフとパナーエフが発行者となっていた『現代人』は、チェルヌイシェフスキーら革命派の主だった論客を集め、強い影響力を持った。

こうした活動を印刷、販売の分野で物質的に支えたのが出版・書籍業界である。ペテルブルクでは、プーシキンら文人に対して手厚い原稿料システムを導入し、メセナの経営を行っていたスミルディンの出版事業が 1840 年代に破綻したため、業界に大きな空白が生じていた¹⁹。そこに参入して、出版・書籍業界の中心となった新しい主体が、

社会改良の思想を共有する出版人たちであった。

その代表例は、ニコライ・セルノ＝ソロヴィヨフである。1834年にペテルブルクで貴族の家庭に生まれた彼は、ツァールスコエ・セローのアレクサンドル・リツェイを銀メダルで卒業し、官途についた。だが、ペリンスキー、チェルヌシエフスキー、ドブロリューポフらの著作に傾倒し、1860年には退官してロンドンにゲルツェンとオガリョーフを訪ねる。そして帰国後の1862年、ネフスキー大通りのルター派教会付近に書店を開設した。この書店は「進歩的」出版物の代理店を引き受け、結社「土地と自由」の合法的プロパガンダを意図すると同時に、自由ロシア出版の『鐘』『北極星』など非合法出版物をとりよせ、結社の地方支部に配布する役割も負った。また、サルトウイコフ＝シチェドリンの著作やナロード向けの識字育成本の出版にも従事している。首都中心部にこうした書店が現れたことの反響は大きく、多くの学生がこれを利用し、秘密警察は監視をした²⁰。

協会と出版との結びつきが支えた改革機運は、1860年前後のロシアに定期刊行物ブームをもたらした。1855年から60年の間に、ロシアの定期刊行物は104点から230点に倍増した²¹。これは、ついに政権を握った前述の開明官僚集団による、検閲の緩和や雑誌・新聞の新規創刊規制緩和などのグラスノスチ政策に後押しされたものでもあった²²。社会思想家ピーサレフは1860年代初めに、「定期刊行物がロシア中で売り切れ、静かな書齋で書き物机に向かって生み出された思想が、広大なわが国全体の財産となり、何万という人にとってほとんど唯一の知的な糧となっている。人々の多くは雑誌しか読まない」²³と書き残している。この風潮に乗って創刊された諷刺誌『イスクラ』は、様々な雑誌を熱心に読んでいると思しき生徒をイラスト(図1)に登場させ、定期刊行物



【図1】「教養ある生徒」

教師：ヴレーミヤ（時、時代）とはどのようなものか。

生徒：ナーシエ・ヴレーミヤ（我々の時代、現代）ですか、それとも単なるヴレーミヤですか。

教師：どちらにせよ、ヴレーミヤはヴレーミヤだ。

生徒：いいえ、違います。『ナーシエ・ヴレーミヤ』は週刊ですが、『ヴレーミヤ』は月刊です。…値段も違います。

*注：『ナーシエ・ヴレーミヤ』（1860-1863）はモスクワのリベラル系新聞。『ヴレーミヤ』（1861-1863）はドストエフスキーがペテルブルクで発行した文芸誌



【図2】「記事、検閲前／検閲後」



【図3】

—信条の違いにかかわらず、あらゆる物書きが集まっている場所があるよ。
—どこだい？
—検閲委員会…

ブームを茶化した²⁴。同誌は、美しい身なりの乙女に見立てた記事が検閲を経ると服を引き裂かれた老婆となるイラスト【図2】や²⁵、文化人のサロンと異なり自己の信条なく検閲委員会に集って言論統制を行う有識者への皮肉【図3】を掲載して、検閲をも大胆に諷刺した²⁶。社会改革という大義のもと、1860年前後に言論活動は活性化したのであった。

ところが1860年代前半には、改革機運はかげりを見せ始めた。社会情勢は農村の緊迫と大学紛争の激化によって

不安定化しており、当局の警戒を招いた。また、1861年2月19日に農奴解放が号令されて最大の目標である農民改革が実現されると、改革を推進する開明的路線は求心力を失い、開明官僚たちは失脚する。1862年にはペテルブルクで大火が起き、アナーキストの陰謀であるとの噂が広まるなど社会情勢はいつそう不安定化し、1866年4月4日に起きたカラコーゾフによる皇帝暗殺未遂事件によって、改革機運の退潮は決定的になった。

こうした情勢下、1862年²⁷と1865年²⁸の「臨時出版規則」よって検閲制度が再編され、出版禁止項目として、「キリスト教の信仰や皇室の名誉および家庭生活等に敬意を持たぬもの」、「社会主義・共産主義」とともに、「法制化される前の政治的問題」が挙げられた。これは、1850年代後半からの改革論議のもりあがりに終止符が打たれたことを意味した。そして、出版人たちの取締が行われた。セルノ＝ソロヴィヨヴィッチは1862年、ロンドンからの非合法文書持ち込み摘発に関連してチェルヌイシェフスキーと共に逮捕され、クラスノ

ヤルスク、さらにイルクーツクへと流刑され、1866年に没した。1865年に成立した新検閲体制の下、『現代人』は発禁となり、多くの他誌も警告処分を受けた。「厚い雑誌」というメディアは以後も教養人向け月刊誌として存続したが、定期刊行物ブームを牽引した頃の尖鋭な政治性は失った。こうして諸協会と出版人が支えた改革機運は終息に

向かうことになった。

2. 1870年代の出版人

これと入れ替わるように、1870年前後からペテルブルク出版界に新たな事業主たちが現れた。彼らがほぼ一様に、西欧の書籍取引業界で経験を積み、地縁のないペテルブルクに移住してきた人々であったことは、先行研究ではあまり関心を払われていないが重要な特質であろう。

先駆けはマヴリーキー・ヴォリフ(1825-1883)である。彼はワルシャワの医師一家に生まれ、15歳で現地の書店に勤めはじめた。そしてまもなく書籍業の中心地たるパリに出て、ある書店で職を得る。三ヶ月後、その書店が多国籍的な書籍業者ブロックハウスに買収された。その社員からドイツの書籍業について学ぶことを勧められたヴォリフは、ライプツィヒへ半年間の修行に出る。さらにリヴィウ、クラクフへと移り、それからヴィリニウスでポーランド語書籍の取引に従事することになった。そして1848年、ポーランド人作家の紹介状を手に、販路の拡大を求めてやってきたのがペテルブルクである。フランス語で仕事ができる人材を求めている老舗イサコフ書店はブロックハウスからヴォリフを推薦されていたため、自店のスタッフとして彼を迎え入れ、ロシアでの書籍取引を教え込んだ。やがてヴォリフは独立し、1853年、ネフスキー大通りの百貨店ガスチンヌイ・ドヴォールに自分の書店を開設したのであった²⁹。旧来のロシアの一般的な書店が小さな平屋の建物で窓もなく、商品陳列も無秩序であったのに対して、ヴォリフ書店はショーウィンドウを備えた初めての「西欧型総合書店」だったとされる。この後、ヴォリフは印刷所、従業員宿舎、印刷工の学校をも順次開設し、19世紀末には従業員200人におよぶ大企業を作り上げた。ヴォリフ社の関連施設は当初はネフスキー大通り周辺に点在していたが、1877年にペテルブルク北部のワシーリー島に一括移転し、一種の企業町を作り出した³⁰。

そして今度はヴォリフが自社の外国書籍取引部門の運営のために、ヨーロッパ諸語を使用可能で書籍取引に関心、経験がある人材を集めた。長年ヴォリフ社に勤めたリブローヴィッチは自身が通っていたドレスデンの大学に、ロシアでの勤務が可能でスラヴ系言語を一つ知っていることを条件とした、ヴォリフ社の求人者が貼り出されたことを回想している³¹。

このような求人者を契機に西欧から流入した人材の一例が、アドルフ・マルクス(1838-1904)である。彼は、かつてのポメラニアの首都シュテッテンで生まれた。父はタワー時計の工場の経営者で教養ある人物だったが、九人兄弟の五番目であるマルクスが13歳のときにコレラで死亡した。そのため彼は中等学校卒業後、メクレンブルク公国ヴィスマーレで書籍商の見習いをし、三年後にはベルリンの医学書専門店に勤

めた。二年後シュテッテンに戻ると、ロシアの大書籍商でライプツィヒの仲買人ビテパージュに誘われ、成功を求めて言葉もわからぬロシアに向かった³²。

こうして 1859 年にペテルブルクに移り住んだマルクスは、ビテパージュ書店で外国書部門に入り、ドイツとの取引に従事したが、64 年、外国書部門が閉鎖になった。そこでヴォリフ書店に移り、ドイツ語部門の番頭となった。30 ルーブルの月給を得てカラヴァンナヤ通りの従業員用の部屋に住んだ彼は、ゲルマン・ゴッペとゲルマン・コルンフェリドに出会う。ゴッペは彼より二歳年上、ウエストファリア出身で、青年時代にドイツ、イギリス、ベルギーの書籍業界で働いた後、1860 年代初めにヴォリフにドイツ語書籍部門の主任として招かれた。コルンフェリドはワルシャワ出身で、外国雑誌定期購読課にいた。書店の常連客たちから「渡来ドイツ人」「まじめなウエストファリア人」「陽気なワルシャワ人」と渾名されたこの三者は宿舎で同室となり、『イリアス』からとって「三人のアイアース」と呼ばれるほどの親友になる。そして 1867 年、ゴッペとコルンフェリドは起業し、モード雑誌やカレンダーを発行しはじめた³³。

仕事には厳しいものの、面倒見がよく温厚だったとされるヴォリフは、独立心旺盛で勝気なマルクスとはそりが合わなかった。結果、マルクスはヴォリフと衝突して書店をやめる。その後、外国語の家庭教師、寄宿学校の教師、ワルシャワ鉄道のドイツ語郵便書記など職を転々としたが、自身で雑誌を発行したいという夢に回帰し、ペテルブルクの様々な店に奉公する同郷ドイツ人たちから借金をして、ある定期刊行物の発行権を買い取った。そして 1869 年末から刊行を開始したのが、絵入り雑誌『ニーヴァ *Niva*』である。同じ頃、ゴッペも絵入り雑誌『全世界画報 *Vsemirnaia illustratsiia*』創刊を計画しており、競合誌の発行者となった二人の関係は決裂した。やがてコルンフェリドも、1875 年からユーモア絵入り雑誌『トンボ *Strekoza*』を発行する。彼らはしばしば自ら編集に加わり、検閲の干渉を避けるべく注意を払いながら、強力なイニシアティブを発揮した。ただし購読部数は、廉価だった『ニーヴァ』が「ロシア全国で購読されない町はない」³⁴と言われるほど売り上げを伸ばし、高級路線の『全世界画報』に圧勝した。これに嫉妬したゴッペはより低価格の絵入り雑誌『ともしび *Ogonek*』を創刊し、『ニーヴァ』みたいなものは一誌でたくさんだとマルクス嫌いのヴォリフに叱責されている³⁵。ナンバーワン雑誌の出版社となったマルクス社は順調に経営規模を拡大し、700 人の従業員で 150 台の印刷機を終日稼働させるに至った³⁶。また、新聞『新時代』を発行したスヴォーリンのように、ヴォリフと接してそのビジネスの手法を学び、大企業を築くロシア出身の出版人も現れた。

このように 1870 年代以降、ペテルブルクの出版・書籍業界は、西欧からの新来者にその中心的な担い手を変えた。この出版人たちは、西欧の出版業界に通暁する一方で、ロシアの文化的伝統からの影響が弱かったため、カレンダーや絵入り雑誌、廉価文庫

など、西欧で流行していた出版物を直接的に模倣し、経営の主軸とした。こうした発行人物は、予約購読者や広告主を募り、原資を集め、雑誌の発行によってさらに資本を拡大するという商業的原理にもとづいていた。売り上げ向上のために各社は、「カレンダーご購入の皆様には、もし統計部門で何らかの誤りや見落としを見つけたら…最も完全に信頼できるカレンダーを読者に提供できるように、お知らせくださるようお願いいたします」³⁷と苦情を受け付けたり、絵入り雑誌に投稿記事を受け入れたりすることで³⁸、読者の嗜好に沿うよう努めた。また、その誌面は、文学作品や名画を無料付録につけたり、パリの最新モードを型紙つきで掲載したり、エキゾチックな動植物や異民族、畸形など好奇心をそそる記事を集めたりすることで、娯楽性を高めた。『ニーヴァ』に掲載された、博覧会で受賞した企業の宣伝に箔をつける双頭の鷲【図4】³⁹や、香水やミシンとニコライ二世の顔が並べられた肖像写真広告【図5】⁴⁰は、ツァーリの表象をも商品化する資本の原理をよく示している。

1860年、『現代人』の発行部数が6,600部であったのに対して、1870年の創刊時に9,000部だった『ニーヴァ』の購読部数は、20世紀初頭には235,000部に達した⁴¹。鉄道と郵便制度の発達と相まって、ペテルブルク発のメディアの対象読者は地理的、階層的にも拡大した⁴²。西欧出身出版人たちの活動によって、ロシアの出版事業は近代的産業の一分野に成長したのであった。

おわりに

以上のように、1860年代から70年代のペテルブルクでは、思想的な出版から商業的



【図4】



【図5】

な出版へと出版・書籍業界の担い手が交替した。「厚い雑誌」から絵入り雑誌へとという主力メディアの変遷は、社会改革という大義をめぐる能動的な議論から、娯乐的、消費的な誌面の受動的な享受へと、流通する情報の質を変えるものだったのであり、前者は協会という「市民社会」的要素と、後者は商業的原理が優先される「大衆文化」的要素と密接に関係していた。こうした出版人の系譜をたどると、近代ペテルブルクの都市社会は「大改革」をはさんだこの時期に、結社全盛の時代から大衆文化の萌芽期へと展開しつつあったという図式を描くことができる。またメディア上で、当局の諷刺も辞さぬ改革論議や、ツァーリの権威をも商品化する商業的原理が展開されたことから、都市を舞台にした近代ロシア社会のある種の自律性をうかがえよう。

商業的な大出版社群がペテルブルク出版界を席捲していた 19 世紀末、知識人層のトレンドは新たな展開を見せた。すなわち 1890 年代の、シンボリストたちの登場と「銀の時代」の幕明けである。よき理解者である実業家たちの後援を受けながら、単行本の自費出版や高品質のイラスト入り美本の発行が行われた他、ベヌア、バクスト、ディアギレフらによる『芸術世界 *Mir iskusstva*』(1899 - 1904) や、『天秤座 *Vesy*』(1904 - 1909)、『金羊毛 *Zolotoe runo*』(1906 - 1909) などの定期刊行物が創刊され、絵画、演劇、建築、音楽、文学、哲学等の批評や論文が掲載された⁴³。

突出した知的エリートの孤立した営みであり、一般読者を寄せ付けなかったとされるシンボリストたちの出版活動は⁴⁴、通俗化した商業的出版への嫌悪を原点の一つとするものであった。メレシコフスキーは 1892 年、論文「現代ロシア文学の衰退の原因と新しい潮流について」の中で、通俗的なメディアと読者たちを、ロシア文学を墮落させた一因としてとりあげている⁴⁵。とはいえ、『芸術世界』が刷られたのは、絵入り雑誌『全世界画報』に精緻なイラストを載せるためにゲルマン・ゴッペが弟エドゥアルドに経営させたゴッペ印刷所であった。もはやハイ・カルチャーが、通俗的な商業的出版と全く無関係に活動を展開するのはかなわぬことだった。やがて 20 世紀を迎え、シンボリストたちが文壇の中心的存在になると、商業的出版は彼らに近づき、市場原理優先の出版業界にとりこんでいくのである。

注

1. 浦雅春「メディアの興亡—19世紀ロシアの文芸ジャーナリズム—」『文学』4(2)、1993年、91—100頁。
2. *Баренбаум И. Е.* Книжный Петербург М., 1980; *Он же.* Книжный Петербург: три века истории: очерки издательского дела и книжной торговли. СПб., 2003; *Динерштейн Е. А.* «Фабрикант» читателей А. Ф. Маркс. М., 1986; *Он же.* А. С. Суворин: человек, сделавший карьеру. М., 1998など。
3. *Рейтблат А. И.* От Бовы к Бальмонту: очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века М., 1991. 2009年に増補版発行。*Он же.* От Бовы к Бальмонту и другие работы по исторической социологии русской литературы. М., 2009.
4. Louise McReynolds, *The News under Russia's Old Regime: the Development of a Mass-Circulation Press* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1991).
5. *Леликова Н. К.* Становление и развитие книговедческой и библиографической наук в России в XIX – первой трети XX века. СПб., 2004. С. 288-309.
6. Jeffrey Brooks, *When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861-1917* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1985). 邦語では、坂内徳明『ルポーク：ロシアの民衆版画』東洋書店、2006年；高田和夫『近代ロシア社会史研究：「科学と文化」の時代における労働者』山川出版社、2004年；同『近代ロシア農民文化史研究：人の移動と文化の変容』岩波書店、2007年。
7. たとえば近代ロシア社会の生活文化を包括的に分析したミローノフの二巻本や、専門職と企業家という新興中間層の文化的アイデンティティを検討した北米の論文集。*Миронов Б. Н.* Социальная история России периода империи (XVIII- начало XX в.): генезис личности, демократической семьи, гражданского общества и правового государства. 3-е изд. СПб., 2003; Edith W. Clowes, Samuel D. Kassow, and James L. West (eds.), *Between Tsar and People: Educated Society and the Quest for Public Identity in Late Imperial Russia* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1991); Harley D. Balzer (ed.), *Russia's Missing Middle Class: the Professions in Russian History* (Armonk, N.Y.: M. E. Sharpe, 1996).
8. Joseph Bradley, “Voluntary associations, civic culture, and *obshchestvennost'* in Moscow,” in *Between Tsar and People*, pp. 131-148; Idem, “Subjects into citizens: Societies, civil society, and autocracy in Tsarist Russia,” *American Historical Review*, 107 (2002), pp. 1094-1123; Idem, “Pictures at an exhibition: Science, patriotism, and civil society in Imperial Russia,” *Slavic Review* 67, No.4 (Winter 2008), pp. 934-966. また、調停吏 *mirovoi posrednik* に公共圏の形成

- 者としての役割を見出したイーズリーの研究も、第一の類型に含まれる。Roxanne Easley, *The Emancipation of the Serfs in Russia: Peace Arbitrators and the Development of Civil Society* (London and N.Y.: Routledge, 2009). これらの研究の展開によって、ロシアでの研究にも市民社会 *grazhdanskoe obshchestvo* という分析概念が持ち込まれている。Гражданская идентичность и сфера гражданской деятельности в Российской империи: вторая половина XIX-начало XX века. Отв. редакторы Пиетров - Эннкер Б. и Ульянова Г. Н. М., 2007; Туманова А. С. Общественные организации и русская публика в начале XX века. М., 2008.
9. シュテファン=ルーヴィヒ・ホフマン、山本秀行訳『市民結社と民主主義 1750-1914』岩波書店、2009年。
 10. Louise McReynolds, *Russia at Play: Leisure Activities at the End of the Tsarist Era* (Ithaca: Cornell University Press, 2002), pp. 5-6.
 11. James von Geldern and Louise McReynolds (eds.), *Entertaining Tsarist Russia: Tales, Songs, Plays, Movies, Jokes, Ads, and Images from Russian Urban life, 1779-1917* (Bloomington: Indiana University Press, 1998); Louise McReynolds and Joan Neuberger (eds.), *Imitations of Life: Two Centuries of Melodrama in Russia* (Durham, N.C.: Duke University Press, 2002); McReynolds, *Russia at Play*.
 12. Лебедева В. Г. Судьбы массовой культуры в России: вторая половина XIX – первая треть XX века. СПб., 2007.
 13. ホフマン、『市民結社と民主主義』、97-130頁。
 14. William Bruce Lincoln, *Nikolai Miliutin, an Enlightened Russian Bureaucrat*, (Newtonville, Mass.: Oriental Research Partners, 1977), pp. 20-36; Idem, *In the Vanguard of Reform* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 1982), pp. 41-76; Idem, “Russia’s Enlightened Bureaucrats and Problems of State Reform, 1848-1856,” *Cahiers du Monde russe et soviétique* XII: 4 (1971), pp. 410-421; Idem, “The Circle of the Grand Duchess Yelena Pavlovna, 1847-1861,” *The Slavonic and East European Review* 48 (1970), pp. 373-387; Idem, “The Genesis of an Enlightened Bureaucracy in Russia, 1825-1855,” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 20 (1972), pp. 321-330.
 15. Русское географическое общество 150 лет. СПб.- М., 1995. С. 11; Lincoln, *Nikolai Miliutin*, pp. 37-38; Idem, *In the Vanguard of Reform*, pp. 91-95; Idem, “Russia’s Enlightened Bureaucrats and Problems of State Reform”, pp. 418-420.
 16. Отчет Комитета общества распространения полезных книг на 1861. М., 1862. С. 3-23.
 17. Блюм А. В. Издательская деятельность С.-Петербургского комитета грамотности (1861-1895)// Книга: Исследование и материалы. Сб. 38. 1979. С. 99-101.

18. 啓蒙的協会の発行物の成果については、相当の影響力を発揮したとの立場をとるもの（*Шумихин В. Г.* Для жизни настоящей и будущей: Книжное дело Вятского земства. Киров, 1996; 高田『近代ロシア農民文化史研究』）と、民衆向け木版出版物ルポークの大海の前にはただの一滴であったとの見解（*Куфаев М. Н.* История русской книги в XIX веке. Л., 1927）に分かれる。しかし啓蒙的協会の出版活動は、首都ペテルブルクの識字委員会ですら 19 世紀末までは断続的なものだったため、その影響力はおそらくそれほど大きくなかったと考えられる。
19. *Баренбаум.* Книжный Петербург: три века истории. С. 83-92.
20. *Баренбаум.* Книжный Петербург: три века истории. С. 174-183.
21. Charles A. Ruud, *Fighting Words: Imperial Censorship and the Russian Press, 1804-1906* (Toronto, Buffalo: University of Toronto Press, 1982), p. 254.
22. William Bruce Lincoln, "The Problem of *Glasnost*' in Mid-Nineteenth Century Russian Politics," *European Studies Review*, 11, 1981.
23. *Рейтблат.* От Бовы к Бальмонту. С. 78.
24. Искра. 1861. No. 34. С. 481. 『イスクラ』は詩人クロチキンと挿絵画家ステパノフが創刊した、革命派の諷刺週刊誌。厳しい検閲を受けながら、1859 年から 1873 年まで発行された。
25. Искра. 1863. No. 34. С. 456.
26. Искра. 1863. No. 12. С. 168.
27. Полное Собрание Законов. No. 38270 (12 мая, 1862). С. 430-431.
28. Полное Собрание Законов. No. 41988, 41990 (6 апреля, 1865). С. 396-406.
29. *Либрович С. Ф.* На книжном посту. Петроград и М., 1916. С. 449-452.
30. *Либрович.* На книжном посту. С. 46, 452.
31. 1879 年、リブローヴィッチはヴォリフ社での仕事に不満を持ち、雑誌『ロシアの書誌 *Rossiiskaia bibliografiia*』に内情暴露記事を書いて、ロシア出版業界にスキャンダルを引き起こした。しかし彼に熱心に仕事を教え続けたヴォリフに敬服し、後にその伝記を著した。
32. *Динерштейн.* «Фабрикант» читателей. С. 13-27.
33. *Либрович.* На книжном посту. С. 390-392; *Белов С. В.* Издательство Г. Д. Гоппе // Книга: Исследование и материалы. Сб.53. 1986. С. 52-69.
34. *Борисов Л. И.* Родители, наставники, поэты ... // Книга и читатель 1900-1917: Воспоминания и дневники современников. М., 1999.
35. *Либрович.* На книжном посту. С. 383-389, 394.
36. *Топоров А. Д.* Систематический указатель литературного и художественного содержания журналы «Нива» за XXX лет (с 1870 -1899 г.). СПб., 1902. С. 9.
37. Всеобщий календарь на 1870 г. С. v. 編集部のごうした呼びかけに応える読者からの手紙は、年間 100 通ほど届いたという。Русский календарь на 1876 г.,

Предисловие.

38. Нива. 1870. No. 9. С. 144などに投稿規定が掲載されている。
39. Нива. 1895. No. 7. С. 176.
40. Нива. 1895. No. 34. С. 821.
41. *Рейтблат*. От Бовы к Бальмонту. С. 41; *Топоров*. Систематический указатель. С. 1. ただし「厚い雑誌」は回覧されたため、一冊あたりの読者数が多い。同時代の評論家ミハイロフスキーは1877年、『祖国雑記』の発行部数8,120部に対して、実際の読者を10万人と推定している。R. J. A. Ware, “Russian journal and its public: Otechestvennye zapiski, 1868-1884,” *Oxford Slavonic Papers, New Series*, 1981, vol. 14, p. 130.
42. 読者の地理分布については Yukiko Tatsumi, “Russian Illustrated Journals in the Late Nineteenth Century: the Dual Image of Readers,” *Acta Slavica Iaponica*, vol. 26 (2009), pp. 159-176 を、身分構成については、巽由樹子「ロシア帝国の公共図書館—「大改革」後ロシア社会における読者層拡大の検証—」『スラヴ研究』55、2008年、249—272頁を参照されたい。
43. *Рейтблат*. От Бовы к Бальмонту и другие работы. С. 307-316; *Баренбаум*. Книжный Петербург : три века истории. С. 306-308.
44. ビエール・パスカル、川崎淡訳『ロシア・ルネサンス』みすず書房、1980年、81頁。
45. *Мережковский Д. С.* «О причинах упадка и о новых течениях современной русской литературы» // Полное собрание сочинений Д. С. Мережковского. Т.15. СПб., 1912. С. 209-305.

Publishers in St. Petersburg in modern times: A comparative study of publishing activities in the 1860s and 1870s

This paper undertakes a comparative examination of the two types of publishers in St. Petersburg in the middle of the nineteenth century.

The first category consists of the publishers who worked from the middle of the 1850s to the 1860s, for example, Nicholas Serno-Solovievich. This was the period when Alexander II succeeded to the throne and “the Great Reforms” started. The intellectual community was shocked by the defeat at the Crimean War and eager that reforms be implemented to modernize Russian society. The Russian intellectuals organized voluntary associations, *obshchestva*, especially in the field of people’s education. In addition, they used printed media such as “thick journals” to disseminate their ideas and accomplishments. The publishers working in the 1860s also wished to improve the social conditions and offered material support to the activities organized by the various associations.

The other type of publishers consists of those who entered the business in the 1870s. Mavrikii Volf, German Goppe, Adolf Marks, and other publishers belonging to this category were of Western origin and were familiar with the book markets in France, Belgium, Germany, and Poland. Their publications, such as illustrated journals and *Adres-kalendar*, imitated the Western print media. As they were operated using the capital collected from subscribers and advertisements, the customers’ tastes and complaints were highly respected. As a result, the contents of these media became entertaining and commercial, with even tsarist symbols being used in advertisements.

The publishers in the 1860s were connected with the voluntary association, the factor that popularized the democratic practices in North America and Europe. On the other hand, the publishers in the 1870s introduced commercial principles into the Russian publishing industry. Recent studies on Russian cities focusing on the voluntary associations and the commercial mass culture point out the autonomy in Russian society during the Tsarist era, while the general view has been that Russian society was oppressed by the authoritarian Tsarist regime. A comparative study of the two types of publishers in St. Petersburg will reveal the autonomous factors in Russian society in modern times.